

3 幼児期の道徳性

(1) 他律的な道徳性と自律的な道徳性

幼児期は基本的に他律的な道徳性をもつ時期である。

(「大人に言われたから」「怒られるから」「先生に言われたから」「決まっているから」)

幼児であっても、自律的な面はもっている。幼児も、他者とのかかわりの中で、状況によっては、相手の反応から善悪を考えることはできる。ただし、幼児は自分の視点から物事を見ていくため、現在自分の目に見えている状態から考える傾向にある。相手の気持ちや意図など目に見えないことを考慮することは難しい。具体的に目に見えること以外は、自分の行動が何をもたらしたか気付かない。しかし、幼児も幼児なりに行ってよいことと悪いことを感じたり考えたりしている。

幼児と大人の善悪の判断にかかわる違いは、何を悪いと感じるか、その結果のとらえ方における視点の差にある。

(2) 幼児期の遊びと道徳性

幼児は、遊びなどの中で人とのかかわりを通してものの見方が発達し、空想の世界を楽しんだり、相手を自分なりに想像して考えたりできるようになり、相手の心を傷つけたことなど、相手のことをある程度思いやることができるようになっていく。

幼児は、友達と一緒に遊ぶ中で、楽しく遊ぶためには参加した自分もルールに従う必要があること、時には、自分たちでルールをつくったりつくり変えたりしてもいいことも、徐々に分かっていく。つまり、道徳性の発達には遊びが大きな意味をもつのである。

(3) 調和的な人間関係と外の世界を知的にとらえる力

幼児期→児童期・青年期

- ・ 直接的で具体的な手掛かりだけでなく、間接的で抽象的なものも考慮できるようになっていく。
- ・ 様々な状況や人々・集団などの特性を考慮したり、一時的なとらえ方でなく長期的な視点から考えられるようになっていく。
- ・ 他者への共感や思いやりも、目に見える手掛かりに基づくものから間接的な手掛かりへ、目の前の直接的な状況だけでなく一般的状況も考えられるようになっていく。

道徳性の発達は、外の世界を知的にとらえる力の発達と他者の視点に立って考える力の発達に支えられて成り立っていく。

子どもは、その発達の流れの中で、自他の視点の分化や関連づけが進み、自分の視点とは異なった様々な視点に立てるようになる。

他者の内面の理解が進み、自己を抑制しつつ自分らしさを形成していく。